

戦争責任論と戦後思想の構造を明るみに出す人

森徳治評論・文学集『戦後史の言語空間』に寄せて

鈴木比佐雄

1

森徳治さんは一九二九年生まれで、戦争末期に海軍少年飛行兵を志願し軍隊経験を持つ、戦争責任を問い続ける評論家であり、詩・短歌・小説などの実作者でもある。戦争経験者でありながら、戦争の悲劇の実相を世界史的な視点から実証的で論理的な評論として書き記すことの出来る森さんのような詩人は稀にしかない。そのような森さんの戦争責任の取り組みの全貌が、この数年の間に私の前に次第に明らかになってきた。森さんが詩誌「柵」に連載していた評論「戦後史の言語空間」や私家版の詩集やその他の評論や詩篇を集めて一冊の『評論・文学集』にして、森さんの言説を後世に残すことは、戦争の悲劇の構造を冷静に考察するための最良の書物になると考えられた。森さんは東京の下町の葛飾区亀有で、私と同じ常磐線沿線に暮らしている。時に亀有駅で下車をして森さんから戦争責任の問題点などを直接伺いしたこともあった。そんな交流の中から同じ批評を志すものとして、戦争体験を事実に基づき

ながらも、深く思索していく森さんの評論と文学作品をまとめることの意義を確かなものと感じていった。

森さんには二〇〇九年三月十日にコールサック社が刊行した『大空襲三一〇人詩集』の解説文を書いて頂いた。その解説「非戦闘員への空襲を糾す―『大空襲三一〇人詩集』に寄せて」には、二十世紀の戦争についての透徹した歴史観が具体的に語られていた。日本本土への初めての空襲は、一九四二年四月一八日の米軍空母ホーネットから発進した十六機の重爆撃機によるドーリットル空襲だ。十三歳の森さんは、北千住行き市街電車に乗車していて千住大橋にかかった時に隅田川上流に黒煙の上があったのを見て、戦争が遠い国の出来事ではなく現実の出来事であることを実感したという。日本は中国やフィリピンなどアジアの国々に侵略することが出来たのは、数多くの爆撃機で制空権を得たからだと指摘する。その観点から森さんは日本が重慶を始め多くの中国などアジアの都市に戦略的な爆撃を繰り返したことによる戦争責任を明らかにして、さらに第二次世界大戦後の核兵器の拡散や、クラスター爆弾、小型版核兵器ともいえる劣化ウラン弾、巡航ミサイルなどの大量破壊兵器を保持し進化する国家意思を批判する。そして日本の加害者として行為を記した上海や重慶爆撃下の中国の詩人の詩篇から始まる『大空襲三一〇人詩集』の本質力点をおきながら書き記していた。森さんの評論を書く立場は、自らも同時代の目撃者であるのだが、自らの立場さえも客観視しうる歴史の審判者とも言うべき理性を兼ね備え、真実を探求し後世に伝えていくという歴史認識に立ち返っていく強靱な批評精神を感じる。そして東京裁判の戦前の支配層がどのように連合国によって「審判」されたことを冷静に辿っていった。

2

森さんは、今回の評論・文学集の前に二〇〇八年二月に評論集『審判』を刊行している。その中の冒頭の評論「審判」は十四章「序章、分岐点、確立、基盤、本格化、情勢指導者、分裂、統帥部、大衆、中枢、責任、追悼、逆照」から成り立っている。日本は日清・日露戦争に辛うじて勝ったが、そのことによって日本人が自らの欠点を覆いつけて過信し、他国の力を侮り過小評価していく体質を増幅させていったことに対して、数多くの資料を駆使してその

問題点を論じている。日本の権力支配の精神構造にまで入り込み、日中戦争から太平洋戦争に至り敗北するまでの大日本帝国の迷走と崩壊を冷静に分析した。どちらかと言うと戦争の原因を作り出した日中戦争に到った原因の解明に

今回の評論・文学集『戦後史の言語空間』は十章「一章 戦後史の言語空間、二章 ニューギニア戦、三章 戦後文学、四章 詩人たち、五章 詩論、六章 詩篇、七章 歌集、八章 童話・少年小説、九章 歴史小説、十章 自伝」から成り立っている。森さんは戦争の悲劇を引き起こした戦争責任を戦前の日本の在り方を粘り強く問いかけ反復しながら批評文や小説・短歌・詩を試みってきた。その森さんの戦後の活動の総体がこの本に収められている。

一章「戦後史の言語空間」の冒頭の「審判の構造」の中で、東京裁判での戦争犯罪は「一、平和に対する罪 二、一般的な戦争犯罪 三、人道に対する罪」だった。連合国の裁判官たちはそれらを日本の戦争遂行者たちに課して裁いていった。森さんはこの中の「平和に対する罪」を取り

上げただけでも「戦勝国も同罪である」と指摘する。なぜなら一と三の罪の概念は、それまでの国際法にはない新しい立法であり事後立法ではないかとその正当性に疑念を抱いている。このように森さんは日本人の精神構造の問題点に取り組んでいくだけでなく世界の政治や軍事のバランスの中で行われた勝者の「審判」の中に立ち現れた様々な問題点も明らかにしていこうとしている。

森さんは一章「餓死について」の中で加藤典洋が『敗戦後論』で提起した「日本の三百万人、アジアの二千万人の死者への哀悼と謝罪へ至る道は可能か」という問いを深く受け止める。そしてそれら戦争の悲劇を伝えるために森さんはまず日本人がこうむった戦争の悲劇を「炎、氷、飢え」という独特な三つのイメージで次のように捉えている。

〈先の大戦で、死者と生者を含め私たちが経験した悲惨な体験を分類すれば、およそ三つになると思われる。一つは広島、長崎の原爆禍を含めた「炎」体験であり、空襲の記憶を刻んでいるものである。二つは、主としてシベリヤ抑留者の体験した「氷」体験、大規模な凍死を含む寒冷の体験である。三つは「飢餓」の体験である。そして、この体験を裏返せば、アジア各地での加害の内容となるものである。炎体験たる空襲については、指摘さ

とによって掛け替えない同世代とその上の世代の命が虫けらのように消えていったとの意味を持続的に考えてきたのではないか。このあまりにも無責任な戦争を引き起こし遂行した者たちの思考方法を暴き出し、その構造的な問題点を正すことは出来ないかと考察してきたのだろう。そのなかでも「飢え」や餓死に至らした体験を森さんは、最も明らかにしなければならない悲劇的な出来事だと考えたのだろう。なぜニューギニア、フィリピンなどの南方の島々で百万人も日本兵士が餓死しなければならなかったのか。また大本営参謀の軍人達の机上の作戦が、いかに日本人兵士だけでなく他国民の悲劇を増幅させて行ったかを次の冷静に記している。

〈しかし、南アジア、東南アジアには、もう一つの餓死があった。戦線がフィリピンに移った時、この地はニューギニアと違って、たくさんの人が住んでいた。もともと食糧自給率の低い地であったので、日本軍の食糧徴発にあつて、住民に餓死者があつた。フィリピン政府は日本軍による虐殺、抵抗軍の戦死、戦争に巻き込まれたの死者に、住民の餓死を含めて戦争死総計百十一万という数字を発表している。また日本軍の駐留していた仏領インドシナ、とりわけ現在のベトナムでは、日本軍の

れることはほとんどないが、組織的かつ継続的な都市爆撃を世界で最初に行った軍隊は日本軍であり、一九三七年、日中戦争の勃発した年の八月、日本海軍航空隊は中国都市（南京・南昌）への渡洋爆撃を敢行した。米軍の日本本土各都市への絨緞爆撃は、日本空軍の先鞭を付けた形式の再創造である、ともいえるのである。

ここで飢餓体験に触れると、日本軍の南太平洋戦線はガダルカナル島戦をはじめとして、累々たる餓死の屍で彩られている。餓死総数は百万を優に越える。とりわけ凄惨なのは、ニューギニア戦線であり、投入兵力約二十万。帰還できた者は約二万。九十パーセントが戦死。そのほとんどが餓死であつた〉

森さんは自分と同じ戦争に巻き込まれていった日本の民衆である兵士達がどんな悲惨な経験の果てに死んでいったか、その無念な思いの代弁をこの書で果たそうとしているかのようだ。ただ森さんは日本の兵士の視点だけでなくアジアの民衆や米軍兵士達など人類を視野に入れながら書き記している。森さんは戦争末期の海軍少年兵の体験で飛行機を飛ばすための現場を経験する中で、日本の軍隊がいかに「兵士の人権」を無視した天皇を頂点とした絶対服従の恐怖の体制で成立していたかを明らかにしている。その食糧徴発に自然災害が重なり、住民二百万が餓死した、と言われている。そういえば戦争中、私は配給米の中に外米と呼ばれた細長い形の、日本米とは明らかに違う米のあつたのを記憶している。それはベトナム米であり、私たちがその米を食べていた時、多数のベトナム人が飢えて死んでいたのである。そう思えば加藤典洋の「謝罪と哀悼」についての言葉は、新しい意味を帯びて私に迫ってくる。

日本軍の百万の餓死は、大本営中央本部作戦室参謀の、現地を無視した作戦と、伝統的にさえなつていた補給作戦の軽視が原因であるが、アジア諸国の餓死は、日本の侵した無謀な戦争と日本軍の食糧略奪の結果である。同じ餓死であるという事はできないが、餓死を生み出した者への怒りに共通項をみつけることはできる。その時私たちが戦後、しなければならなかったことは、「哀悼」の前に戦争責任者の追及であつたことを思わずにはいられない。百万の兵士の餓死を生み出した大本営本部作戦課の作戦参謀の罪は、正式に問われたことは一度もない。続けては、戦争をはじめた者の責任追及の運動があつて、はじめてアジア二千万死者へ謝罪の顔を向けることができる、ということも、考えなければならなかった。〉

森さんは日本人だけでなくアジアの民衆を巻き込んだ「飢えの体験」を引き起こした大本営中央本部作戦参謀達の責任追及を日本人自身が身を斬る思いでやるべきだと語っている。それこそが加藤典洋の「謝罪と哀悼」に適用ものだと結論づけている。私は海軍少年兵であった森さんが日本の軍隊のあり方を徹底して批判していくことに森さん自身の自国と他国の死んでいった多くの民衆に対する「謝罪と哀悼」を感ずることができる。またニューギニア戦線やフィリピン戦線の主導的な作戦を立てた大本営作戦参謀の辻政信を戦後に国会議員にしよう日本人の中で歴史から学ばない人々に姿勢に強い危惧を抱いている。その日本人の歴史的な経験を不問に付してしまいう危機意識から「戦後史の言語空間」の構想が生れたことは確かなことだろう。敗北の根源的な問題点を抉り出さない日本人の責任をとらせない曖昧な思考方法に警鐘を鳴らしているのだ。「餓死について」の最終章で森さんは次のように語っている。

〈戦後史を、思想的言語獲得の空間と捉えれば、戦争責任追及の問題が国民的課題としては、この戦後史の空間にほとんどすっぽりと抜け落ちている、といわねばなら

ない。この、戦争責任の問題を含め、戦争からの伝言を戦後史の中にみつけない、というのが私の本文を書く願いののである。〉

森さんは一章4『野火』において、大岡昇平の小説『野火』で罪もない他国の住民を殺し、さらに戦友に勧められて人肉を食べた田村一等兵が神の怒りを感じながら狂人となっていくことを紹介していく。またイギリスの作家バリ・コリンズの『審判』で修道院地下室に閉じ込められたロシア人将校七名の中で生き残った二名によって他の者は食べられた実話を元に書かれた独白劇にも触れている。森さんは日本や世界の戦後文学において「飢え」の果てに行われた人間の行為を神のごとく他の人間が「審判」するとは出来るだろうかという問いを発している。

一章5『氷』について（石原吉郎と鳴海英吉）と6『氷』について（続）では、二人のシベリヤ抑留者の詩人の「氷」体験を紹介している。石原吉郎は関東軍のロシア語情報を解読する特務機関にいた人物であり、鳴海英吉は中国戦線の最前線にいた下級兵士だった。二人の詩人の異なる視点からシベリヤの「氷」体験の全体像を浮き彫りにさせようとしている。

そして次の一章7『通路』、8『最後の戦闘機』、9『戦

争責任』、10『蚤の跳梁』、11『頂点』、12『頂点——（権

威と権力）』、13『戦争勃発の原因』、14『戦後からの声』などによって、自らの戦争体験の意味を問いつつながら、戦後詩を切り拓いてきた若き詩人たちの詩篇や詩論を通して戦争責任の問い方を検証していった。その試みはあの未曾有の悲劇の根本原因を上代の詩人・小説家がどのように感じ考えていたかを森さんが丁寧に通いつつながら、戦後の人びとがどのように格闘しながら戦後史の中で無責任な体制を克服するために思想的な基盤を構築しようとして続けたのだ。大日本帝国の暴走が軍部の「既成事実」化によって自分の「権限外」のことであると言い、あつてはならない侵略戦争を承認していった「従順な服従心」を日本人の思想的な弱点だと森さんは洞察している。そのような「無責任体系」・「権限外」・「既成事実」などの負の遺産を自覚しながら「戦争からの伝言を戦後史の中につづけた」という思いが、詩や小説など戦後文学への批評活動につながっていったのだろう。日本は戦争をしなくてもいい多様な平和への選択があったことも戦前の外交交渉を辿りながら、その可能性の見解を語っている。歴史を語る際にも「既成事実」化を歴史の必然などと思考を停止させない粘り強い論者が森さんの文脈に流れているのだ。

3

森さんの言説の特筆すべきことは、日本人の「飢え」の体験の極限を独自の方法で肉薄して説明しようとする試みることだ。それが二章「ニューギニア戦」の「前文」、1（砲撃）、2（山越え）、3（飢餓）だった。森さんは二〇〇九年に地元の図書館の書棚に「ニューギニア戦記」という一兵士の書簡の束と昭和五十年代の週刊誌記事のコピーを見つけた。そのコピーには「三十五年目の告白 私は戦友の人肉で生きのびた」と書かれてあった。その記事に書かれてあった人物は、当時は寺の住職をしていて、懺悔の思いで『ニューギニア戦線敗残兵の告白』という手記を自費出版し、その本の内容に基づいたインタビュー記事があったらしい。森さんはその作者や関係者に連絡を取ったが、高齢になられた人のことで詳しい話は聞くことはできなかったらしい。しかしそのコピー記事やニューギニア戦の関係資料を読むうちに、手記を書いた人物が森さんの中で動き始めていった。森さんはその兵士に成り代わって駆逐艦に乗せられてニューギニア東部北海岸のハンサに降り立った。本人に成り代わるために独白形式の行分け詩を挟みながら、その兵士がどうしてジャングルの中を彷徨い、ついには戦友の人肉を食べるまでになったかをその兵士の感受性に肉薄しながら記そうと試みられている。リアリス

ムの極限がこのような手法になるのではないかと私には思われた。恐竜に似た形をしたニューギニアだが、その尾の付け根部分にはサラワケットというニューギニアの人跡未踏の海拔四一〇〇メートルの山がある。日本軍の作戦参謀たちは、米軍とオーストラリアがいるラエを離れて北海岸に出るために、八五〇〇名の兵士に前人未踏の山を越える指令を出した。日本兵たちは山岳地帯やジャングルの中を歩かされて、次々に死んでいった。日本兵の遺体には蛆がわいた。兵士たちは食料が尽きてその蛆を白米のように食べた。次に蛆の無い死体を見つけると、人肉食を行ったという。そんな自分と同じ兵士であった者たちの地獄の風景と鎮魂の思いを森さんは詩と散文で書き記したのだった。

第三章「戦後文学」(1~5)では、森さんが影響を受けた小説家や評論家である椎名麟三、野間宏、武田泰淳、埴谷雄高、吉本隆明などの試みを紹介し検証している。また第四章「詩人たち」(1~5)では、峠三吉、濱口國雄、鮎川信夫、黒田三郎、木原孝一、河野文一郎、関根弘、石川逸子などの戦後詩の試みが死者たちの鎮魂の思いを様々な手法で試みていることを紹介している。第五章「詩論」吉原幸子、真壁仁、鳴海英吉達の全体像を掘り下げて論じた。第六章「詩篇」は私家版で詩集だった『祖父が少年だった時戦争があった』十八篇と長編詩『雲の記憶——厚木航空基

地1945年——』を、七章「歌集 鏡」では一八〇首もの短歌を収録している。リアリズムの作風であるが森さんの誠実な人柄が個人的な事柄を超えて時代の証言となった作品群だ。また八章の「童話・少年小説」は、教師時代の生徒との交流の中に歴史の悲劇を具体的に手触りのある形で伝え、子供たちに考えさせてその発言から自分も学んできた姿勢が良く出ていて、森さんはきつと良き先生だったと感じられた。また九章「歴史小説」は、森さんが時代小説の職業作家としての可能性を秘めていたことが分かる。十章「自伝」を読めば分かるとおり、戦後には、長男として弟や妹の学費や妻子を養うために、教職を選んだらしい。昭和十九年に海軍少年飛行兵に志願した。多くは特攻隊に編成されたりしたが、森さんは整備兵に配属となり、戦争末期の航空隊の現場から、世界の様々な問題を自分の頭脳で考えるようになったのだ。しかしそのことによって純粋に批評や文学を通して思索を深めてきたことが森さんの独自性を養い、根源的な思索を続ける文体に結実していったのだと思われる。この重厚な『評論・文学集』が戦争責任論や戦後思想の構造を根源的に考察している多くの人びとに折りに触れて読まれて、語り継がれていくって欲しいと願っている。